

2021年2月

大学入学共通テスト分析資料

西北出版 株式会社

はじめに

2017・2018年度の試行調査（プレテスト）を経て、2021年1月、ついに大学入学共通テストが実施されました。コロナウイルスの流行に伴い、第1日程（1月16・17日）と第2日程（1月30・31日）の2回の受験機会が提供されるという異例の措置の中での実施となりました。この2回の本試験と2回のプレテストの合計4回の試験から、今後の入試改革の方向性が見えてきたと言えます。

西北出版では、2018年度からプレテストに準拠した試験問題を作成しています。特に模擬試験においては、単に形式を似せるのみならず、新しい形式の試験がどういった力を求めているのかを分析し、問題に反映させることが、受験生に今後の学習の指針を与える上で重要であると考えています。本冊子では、弊社が分析した共通テストの科目毎の特徴が記されています。2022年の試験に向かうすべての方の指針となることを願っております。

西北出版 編集部

目次

英語（リーディング）	p. 1
英語（リスニング）	p. 3
数学	p. 5
国語	p. 7
物理・物理基礎	p. 9
化学・化学基礎	p. 11
生物・生物基礎	p. 12
地学・地学基礎	p. 13
理科まとめ	p. 14
世界史B	p. 15
地理B	p. 17
日本史B	p. 19
現代社会	p. 20
倫理	p. 21
政経	p. 23
倫理, 政治・経済	p. 24

英語（リーディング）

ポイント

- ・ 根底にあるのは、英語の「表現力」の改善
 - ⇒ 「日常生活で英語を用いる力」を養うための「日常生活を舞台とした題材」の出題
- ・ 求められている力は「思考力・判断力」
 - ⇒ 課題解決型問題，複数正答問題，事実と意見の区別問題など多様な出題
 - ⇒ 脱「知識・技能」問題（発音・アクセント問題，文法問題がなくなった）

今回の入試改革において、当初は英検などの民間試験を導入し、従来の「読む・聞く技能」の測定に加えて「話す・書く技能」の測定も行うことが目指されていた。これは、日本の英語教育で課題となっていた、英語で物事を表現する（話す・書く）力の不足を改善することを目的としたもので、「日常生活で英語を用いる力」の養成を目指したものと言い換えることができる。

民間試験の導入は頓挫したが、読む技能を測るリーディングの試験において、「日常生活において英語を読むこと」を強く意識した題材が出題されるようになった。大学入学共通テストの実施に向けて2017年と2018年に行われた「試行調査」（プレテスト）では、海外の遊園地のウェブサイトを題材に混雑状況を把握させる問題や、学校の外国語指導助手が書いたメモの意図を答えさせる問題が出題された。2021年の大学入学共通テスト（第1・2日程）でも同様に、友人とのメールやファンクラブの案内、レビューサイトやブログ、英語教師とのやりとりのメール、また授業で用いるという設定の文が出題されている。

2018年のプレテストと2021年の2回の試験では、大問構成は大きくは変わっておらず、出題フレームとしては1つの形が見えたと言える。なお、共通テスト2回の語数は5,400語程度で、センター試験に比べて約1,000語増加している。ここから、難解な英文を精読しながら読解するのではなく、日常的な英文をすばやく読み解く力に比重が置かれていることがわかる。

「すばやく読み解く」ということでは、センター試験では「パラグラフごとに主旨を理解して各設問を解く」といった解法が有効であったが、共通テストでは、さまざまな箇所述べられている内容を総合して正解を選ぶという設問（課題解決型問題）が増えており、より思考力と判断力が求められるようになった。例えば第1日程の第4問では、与えられた英文や時刻表、混雑状況を表すグラフをもとに、姉妹校の生徒をもてなすスケジュールを立てるという設問が出題されている。

また、プレテストでは「正解を1つ以上選んでもよい」と英語で注意書きのついた設問も出題されていた。マークシートの技術的な問題で、この形式の出題は見送られたが、正解を2つ選ぶ問題（第1日程 第6問B問3，第2日程 第6問B問4）や、正しい組合せを選ぶ問題（第1・2日程 第3問B問1 他）など、単純な消去法では答えられない設問も多く出題されている。

この他にも、両日程の第2問において、fact（事実）または opinion（意見）を区別して選ばせる問題が出題されており、本文に合致するものを選ぶというだけでは正解に辿り着けない設問となっている。

この「事実と意見の区別」は、学習指導要領で指導が求められている力でもある。同じく学習指導要領の項目の表れとして、入試改革の中でも文部科学省の資料で引用された、平成21年公示の学習指導要領における「語彙、綴り、発音、文法などに多様性があるということに気付かせる指導」を反映した変化が起きている。大学入学共通テストでは、センター試験とは違って、発音・アクセント問題と文法問題は一切出題されていない。また、第1日程の第2問Aの summarised や、第2問Bの realise などのように、イギリス英語も出題されている。

発音・アクセント問題と文法問題が出題されていないことは、単純な「知識・技能」で解ける問題の出題が減っていること、すなわち「思考力・判断力」が求められていることと同義である。

以上のように、大学入学共通テストでは、「思考力・判断力・表現力」を意識した出題となっている。受験生は、参考書を暗記して終わりではなく、それを実際に用いることのできる力を養うことが求められている。

英語（リスニング）

全般

英語リスニングについては、センター試験から共通テストになる過程で、大きく変化した。次の4点が特に大きく変わった点である。

1. ずっと懸案事項としてあげられていた、2回読みについては、1回読みと2回読みの混合となり、更に2回読みの量が減少してきている。
2. 場面設定も変更があり、リーディングの英文と変わらないレベルの英文もスクリプトには登場している（第5問）。また、使用する単語についても、日本の高校生にとって比較的馴染みのない単語もより多く登場するようになった。
3. ナレーターが、センター試験では北米系のみだったが、試行調査（プレテスト）から、英国系のナレーター、日本人のナレーターが登場している。
4. 英問英答の方針に従って、設問も全て英文となっている。但し、問題の難易調整のためと考えられるが、日本語によるヒントが付されている問題がある。

各問題の形式概要

第1問A

4問 音声は2回流れる ナレーターは北米系男性
男性の短いモノログを聞いて、選択肢から正解を選ぶ問題。

第1問B

3問 音声は2回流れる ナレーターは北米系女性
女性の短いモノログを聞いて4つの絵から適当なものを選択する問題。

第2問

4問 音声は1回のみ流れる ナレーターは北米系男性・女性
短めのダイアログを聞いて、適当な絵を選ぶ問題。絵は4つある問題と、1つの絵の中に4つの選択肢が入っている問題がある。また、状況説明がヒントとして短い日本文で添えられている。

第3問

6問 音声は1回のみ流れる ナレーターは問題により北米系男性・女性、または英国系男性・女性
短いダイアログを聞いて、問題冊子に記されている質問に答える問題。ヒントとして状況が日本文で記されている。

第4問A

2問 音声は1回のみ流れる ナレーターは問題により北米系男性、または北米系女性
図表の空白を埋める問題。選択肢の重複利用も許容としている。場面設定は日本文で添えられている。

第4問B

1問 音声は1回のみ流れる ナレーターは日本人男性、北米系男性、英国系女性、北米系女性

条件に合った選択肢を1つ選ぶ問題。4人の多様なナレーターが登場する。場面設定は日本語で添えられている。

第5問

2問 音声は1回のみ流れる ナレーターは北米系男性

講義を聞いて、図表を埋めたり、選択肢を選んだりする問題。英文には、それなりに難しい単語も登場する。但し、難しい単語については、その意味が分かることまでは要求されていない。場面設定は日本語で添えられている。

第6問A

2問 音声は1回のみ流れる ナレーターは北米系男性と北米系女性

2人の会話を聞いて、それぞれの人に関連した設問に答える問題。場面設定は日本語で添えられている。

第6問B

2問 音声は1回のみ流れる ナレーターは日本人女性、北米系女性、北米系男性、英国系男性

4人が話し合いをしていて、ある事柄について同じ意見の人の人数を答える問題、及び、ある特定の1人の主張に合う図表を選ぶ問題。場面設定は日本語で添えられている。

数学

【試行調査（プレテスト）2回分の形式】

全体にわたって、会話文または資料文を読み進めながら解答していく形式であった。選択問題が占める割合が大きかったことが大きな特徴といえる。また、数学を用いて日常生活での問題・課題を解決するテーマの出題が見られた。

数学Ⅰ・Aの必答問題においては、計算結果や答を数値としてマークする問題は少なく、数値や数式の関係、資料等から読み取れる事象を解答する選択肢形式の出題が目立った。数値を考える必要がある問題についても、選択肢が与えられている場合があった。選択問題においても、必答問題と似た傾向が見られるが、従来どおりの計算結果・数値をマークする出題も盛り込まれた。

数学Ⅱ・Bでは、数学Ⅰ・Aと比べて数値を答える問題が多かったものの、やはり選択形式の問題が数多く出題された。必答問題においては、三角関数や指数関数・対数関数の基本事項を問いながら、それらを組み合わせて考える発展的な問題が出題された。また、微分・積分の問題においては、これまでのような面積を求める問は見られず、関数のグラフの概形を選択させる出題があった。選択問題では、簡単な内容を数値問題で問いつつ、それを発展させた内容に踏み込むフローが見られた。

【共通テストの形式】

○ 第1日程

数学Ⅰ・Aの必答問題では、試行調査に比べて選択肢形式の問題が減少した。具体的に数値を計算する問題もあったが、目的はその技能を問うことよりも、問題をより抽象化した際の一般的関係の把握力を問うことにあったと考えられる。選択問題では、一見するとやや難しい最終課題・目的に向けて簡単な要素の穴埋めや計算で誘導しながら到達させる形式が多く取られた。例えば、第3問（確率）は、球の入った箱が2つの状態で、誘導しながら条件付き確率まで求めさせた後、それを踏襲して箱が3つの場合、4つの場合を考えさせるフローである。第4問（整数）は、円周上に置いた石の移動パターンについて、場合の数的な思考で考えられる簡単な問いと、不定方程式の問いの両方を示した上で、やや面倒な移動のパターンについて不定方程式を用いて考察させた。

数学Ⅱ・Bの必答問題では、数学Ⅰ・Aと対照的に、プレテストに比べて選択肢形式の問題が増えた印象を受けた。ただしこちらも、具体的な考察を一般的な内容に昇華させる出題がなされた。選択問題は数学Ⅰ・Aと同様に、誘導しながら簡単な計算をさせて、それを組み合わせて複雑な問いを解決する形式が取られた。例えば、第5問（ベクトル）は、最終的に正十二面体における空間ベクトルについて考えるという目的があるが、正五角形における平面ベクトルについての問いからスタートし、問題をより考えやすくしている。内容を具体的に見ても、実際はベクトルの大きさや内積を求めさせる問題がほとんどで、難易度はさほ

ど高くなかった。

○ 第2日程

数学Ⅰ・A、Ⅱ・Bともに、第1日程に比べ数値を答える問いがメインとなり、試行調査よりもセンター試験に近い形式であった。それでも、「設定したテーマに対して数学的アプローチを行う」という姿勢は見られた。

数学Ⅰ・Aの第2問では、2次関数を用いた売上試算と利益の最大化についての出題がなされた他、データの分析における平均値や分散の一般式について問う試みがあった。

数学Ⅱ・Bの第4問は、タイルの並べ方の総数を数列で解決する出題だったが、簡単な例の組合せから、2つの数列を用いた漸化式を導いており、このような形式は第1日程と同様といえる。ただし、目的が明確・具体的であったためか、誘導は第1日程ほど詳細・丁寧とはいえなかった。

○ 2つの日程の差異

第1日程は新傾向問題を前面に押し出し、第2日程は新傾向問題をある程度抑えつつ、従来型問題の割合を増やすという結果であった。今年度の第2日程は緊急措置的意味合いがあり、また導入初年度であったため、今後は本試験と追試験という比較のしかたになるが、公平性を考えれば次年度以降は今回ほどの差異は見られないのではないだろうか。

【試行調査・共通テストの共通点】

大きなテーマとして「数学による数学的課題の解決」を脱し、「数学によるあらゆる課題の解決」を目的に据えているという点は一貫していた。また、機械的・方法論的に解き方を覚えているだけでは対応できない問題が増え、分野やテーマを一般化できる大局観が求められるようになったと言える。ただし、ゼロから考えて解決することはできなくても、手元にある前例を頼りに導いていくことができればそれでよい、という見方もできるだろう。

【センター試験と共通テストの相違点】

上記にもある通り、「数学という分野内の課題を、数学を使える人たちが、勿論数学を使って解決している」という、ある意味閉塞的かつ他人事になってしまいがちな問題を、「日常のあらゆる課題を、自らが、数学をひとつの選択肢として解決する」というところまで大きく引き寄せた。

また、どちらも基礎学力を問うという目的ではあるが、その方法は異なる。センター試験が定理・公式等を利用する技能、あるいは解法の習熟度を測る問いが中心だったのに対し、ある程度のステップは用意しておいて、途中でピースを集めさせながら、より高度な課題に昇華していくのが共通テストである。共通テストがこのような出題形式を取り入れたことによって、「これを学ぶと何ができるのか」という目的をもった学習が必要になり、「課題の解決のために何をを用いるべきか」という最適な手段を選択する力が問われることになった。

国語

○ プレテストについて

過去2回のプレテストでは「実用的な文章」の出題や図表の導入などが積極的に見られ、大問は基本的に図表を伴った文章や、複数の文章・資料を提示する形式となった。設問についてもセンター試験からは大きく様相が変わり、複数の文章を総合的に読解するもの、図表と本文を読み合わせて判断するもの、構成や表現について総合的に判断するものなど多彩な出題が見られた。

しかし、2回のプレテストを比較すると、新傾向を全面的に打ち出していた第1回に比べ、第2回では詩やエッセイを題材とする、本文の内容を踏まえて「実用的な文章」の空欄に当てはまる内容を選ばせるといった新しい試みが見られる一方で、出題文は単一の文章として設問内で別の資料を提示したり、従来のセンター試験型の読解問題に近い設問も一部に取り入れたりするという変化が見られた。

○ 共通テストについて

第2回プレテスト実施後に「記述式問題の導入中止」という大きな変更があったが、その影響もあってか、共通テスト第1日程では「センター試験への回帰」とでも言うべき流れが見られ、第2日程ではその傾向がさらに顕著となった。

例えば、「実用的な文章」については、まったく出題が見られなかった。また、共通テストを大問の形式ごとに見ると、「本文と関連のある別の文章や資料を設問内で提示する」形式(第1日程第1・2・3問、第2日程第4問)や「最初から2つの本文を提示する」(第1日程第4問)形式は、第2回プレテストに引き続いて設定された。しかし、こうした複数の文章・資料の提示を一切行わない、「単一の本文」による出題も復活している(第2日程第1・2・3問)。

設問については、現代文を扱う第1問・第2問では第1日程・第2日程ともに、基本的にはセンター試験型の漢字問題・語句問題・読解問題を出題しつつ、最後の設問のみが新傾向に基づく出題となった。具体的には、第1日程第1問問5は別の文章や本文のまとめなどを提示して能動的に考える設問、同第2問問6は本文の批評文を提示して両者を読み合わせて考える設問、第2日程第1問問6および第2問問6は授業中の会話や発表を想定して適する内容を考えて選ばせる設問となっている。

古文を扱う第3問については、第1日程ではほぼ第2回プレテストどおりの設問構成であったが、第2日程では問3・問4のようにセンター試験型の性格が強い読解問題が導入された。一方で、文法事項・語句・表現を総合的に問う第1日程問3や第2日程問2のような出題は第2回プレテストを継承しており、関連する文章と読み合わせて考える設問(第1日程問5)や本文中で繰り返し登場する語句について考察する設問(第2日程問5)のような新傾向の設問も出題されている。

漢文を扱う第4問では、漢文と散文という2つの出題文を提示した第1日程に対し、第2日程は設問（問7）内で別の文章を提示するという形になり、読み合わせて判断する形式の問題も第1日程の2問（問3・問6）から第2日程では1問のみ（問7）に減少した。また、句法とその意味を幅広く問う第2日程問3は従来あまり見られなかった形式の設問とも言えるが、これ以外の設問については、センター試験型の出題を受け継ぐ傾向が強くなっている。

○ センター試験から共通テストへの変化について

第1日程・第2日程を通じて俯瞰すると、共通テストでは従来のセンター試験を継承した形式の設問を出しつつ、第2回プレテストで見られたものを中心に、新傾向の設問（あるいはこれに類する形式の設問）を含める形でそれぞれの大問が構成されている。一方で、第1回プレテストで見られたような「全面的に新傾向を導入する」という性格はかなり薄れており、特に現代文を扱う第1問・第2問では、新傾向による設問は両日程とも1問（枝問を含む場合あり）にとどまり、これ以外はセンター試験型の出題を継承した設問となっている。

これらを踏まえれば、共通テスト・国語は、「プレテスト（特に第2回プレテスト）で見られた新傾向の出題を取り入れる一方、センター試験の歴史を通じて熟成されてきた従来型の出題も積極的に行うことで、知識や読解力とともに思考力・判断力を問う、ハイブリッド型のテスト」となったと位置づけることができる。

物理・物理基礎

■物理基礎

問題の構成

2018 試行調査は大問数 3 そのうち第 2 問に A・B の中間を設定，設問数 11，解答番号数 11 であった。2020 センター試験は大問数 3 そのうち第 2・3 問に A・B の中間を設定，設問数 13，解答番号数 13 であった。2021 共通テストは大問数 3 そのうち第 2 問に A・B の中間を設定，設問数 14（第 1 日程）13（第 2 日程），解答番号数 19（第 1 日程）15（第 2 日程）であった。

出題形式・内容

センター試験よりも，思考力問題（実験・観察，探究活動を重視した問題や，日常生活と関連のある題材を扱ったような問題）が増えたが，センター試験より若干易しくなった。

試行調査・センター試験・共通テストともに正解選択肢以外の選択肢で部分点を与える設問が 1 題出題されている。共通テストでは，数式の数値を選択させる完全解答の設問が 1 題出題されている。共通テストでは，一つ前の解答番号が正解しないと点を与えない連動型の設問が 1 題出題されている。

第 1 問は小問集で，例年通り，基本的な知識・理解を問う問題であった。第 2 問はセンター試験と同じ，波・電気分野の大問であり，日常生活と関連のある題材について科学的に探究する問題といえ，問題作成方針に沿った内容である。第 3 問の台車の運動の実験に関する問題は，原理・法則の正確な理解と，実験データを読み取り，数学的な手法を用いて活用できる力を問うという，問題作成方針に沿った問題であった。

第 1 問問 4 の会話文問題は，第 2 回試行調査を引き継いだといえ，さらに，誤りを含むものを 2 つ選ぶ，新しい形式の問題であった。第 2 回試行調査において，物理にあつて物理基礎にはなかった，「解答の数値を 1 桁ずつ解答させる形式の問題」が登場し（第 3 問問 2），また，文字式のみ計算問題は出題されなかったことから，全体的に，数値計算を重視した出題であったといえる。

■物理

問題の構成

2017 試行調査は大問数 4 でそのうち第 3 問に A・B の中間を設定，設問数 19，解答番号数 31 であった。2018 試行調査は大問数 4 でそのうち第 2～4 問に A・B の中間を設定，設問数 18，解答番号数 26 であった。センター試験は大問数 6（第 5・6 問は選択）で第 2～4 問に A・B の中間を設定，設問数 20（全 23），解答番号数 20（全 23）であった。2021 共通テストは大問数 4 でそのうち第 2・3 問に A・B の中間を設定，設問数 21（第 1 日程）22（第 2 日程），解答番号数 28（第 1 日程）27（第 2 日程）であった。

出題形式・内容

2017 試行調査でも正解が過不足無くマークされていなくても部分点を考慮する、完全解答、正解以外の別解の部分点を考慮する出題が多数あり、一つ前の解答番号の正答・誤答に関係なく選ばれた番号によって正解が7通り存在する連動型の設問が出題された。2018 試行調査では、一つ前の解答番号の正答・誤答に関係なく選ばれた番号によって正解とする連動型の設問と、正解以外の別解の部分点を考慮する設問が、1問ずつ出題された。2020 センター試験では、正解以外の別解の部分点を考慮する設問が3問出題されたが、連動型の出題は無かった。共通テストでは、正解以外の別解の部分点を考慮する設問が2問（第1日程）3問（第2日程）出題され、一つ前の解答番号で正解が選ばれないと正解としない連動型の設問が第1日程と第2日程で1問ずつ出題された。特に第2日程では、2017 試行調査で出題された、一つ前の解答番号の正答・誤答に関係なく選ばれた番号によって正解が7通り存在する連動型の設問が出題された。この形式が2022年共通テストでも出題されるかどうかで意図的なものかどうか判断する。

センター試験よりも、思考力問題（実験・観察、探究活動を重視した問題や、日常生活と関連のある題材を扱ったような問題）が増え、センター試験よりも難化した。

第3問Aはダイヤモンドをテーマにした、光の屈折、分散、全反射に関する問題で、見慣れないグラフを考察する問題もあった。第3問Bは、蛍光灯が光る原理を扱った、原子分野の問題であった。A、Bともに、状況を正確に把握するのに手間取ったと思われる。

第2回試行調査において出題された、「解答の数値を1桁ずつ解答させる形式の問題」が登場した（第2問A問1、問3）。第4問問4は会話文問題であったが、短文であった。

化学・化学基礎

■化学基礎

問題の構成

2018 試行調査は大問数 3 そのうち第 1 問に A・B の中間が設定されていたが、2020 センター試験・2021 共通テストは大問数 2 で A・B の中間を設定は無かった。2018 試行調査・2020 センター試験・2021 共通テストのいずれも、設問数は 12～15 問の範囲内で、解答番号数 13～18 の範囲内であった。

出題形式・内容

リード文の長さ、選択肢の数、図表の数などに、試行調査・センター試験・共通テストそれぞれに特有の形式は無く、出題内容によって文章の長さや図表の数は左右されていた。全設問における正誤選択問題、組合せ選択問題、実験問題、計算問題、前の設問と連動型問題それぞれが占める割合は、いずれも、共通テストは試行調査よりもセンター試験に近かった。

■化学

問題の構成

2018 試行調査は大問数 5 でそのうち第 1～3 問に A・B の中間が設定されていた。2020 センター試験は大問数 7 (第 6・7 問は選択) で A・B の中間の設定はなかった。2021 共通テストは大問数 5 で A・B の中間の設定は無く、選択問題も無かった。2018 試行調査・2020 センター試験・2021 共通テストのいずれも、設問数は 26～29 問の範囲内で、解答番号数 29～34 の範囲内であった。

出題形式・内容

リード文の長さや選択肢の数については、試行調査・センター試験・共通テストで大きな違いは無かった。共通テストの図表の数については、試行調査よりもセンター試験に近かった。いずれも特有の形式は無く、出題内容によって文章の長さや図表の数は左右されていた。全設問における正誤選択問題、組合せ選択問題、実験問題、計算問題、前の設問と連動型問題それぞれが占める割合は、**いずれも、試行調査・センター試験・共通テストに大きな違いは無かった。**

生物・生物基礎

■生物基礎

問題の構成

2018 試行調査・センター試験・2021 共通テストいずれも大問・中間・設問数は共通している（センター試験のみ解答番号数が2～3多い年度もある）。いずれも、大問数3で各大問にA・Bの中間を設け、設問数16前後、解答番号数16～20である。

出題形式・内容

2018 試行調査・センター試験・共通テストいずれも、会話文形式のリード文や資料・実験データから結果を読み取る考察問題などが出題されている。文章の量については、共通テストは試行調査よりもセンター試験に似ている。共通テストでは、正しいものを過不足無く含む選択肢を選ばせる設問で、不足した選択肢を選んだ場合でも部分点を与える出題があった。出題内容から別解と判断したとも考えられるため、この出題形式が2022年共通テストでも出題されるかどうかで意図的なものかどうか判断する。

■生物

問題の構成

2017 試行調査は大問数6でそのうち第2～5問にA・Bの中間を設定、設問数27、解答番号数22であった。2018 試行調査は大問数5でそのうち第1・2・5問にA・Bの中間を設定、設問数27、解答番号数29であった。センター試験は大問数7（第6・7問は選択）で第1～5問にA・Bの中間を設定、設問数30（全33）、解答番号数29 or 30（全32）であった。2021 共通テストは大問数6でそのうち第5・6問（第1日程）・第1問（第2日程）にA・Bの中間を設定、設問数26、解答番号数27であった。

出題形式・内容

2017 試行調査は文章量が多く、写真も多用された。文章読解力や資料・実験データから結果を読み取る考察力が試される出題であった。2018 試行調査は会話文形式や生活に身近な題材のリード文が採用され、写真も使用された。資料・実験データから結果を読み取る考察力が試される出題が多かった。センター試験でも、会話文形式のリード文が採用され、知識問題とともに資料・実験データから結果を読み取る考察問題が出題されていた。2017・2018 いずれの試行調査でも、完全解答の出題で部分点が考慮されている設問が出題されているが、センター試験・共通テストでは採用されていない。共通テストの出題内容は試行調査よりもセンター試験に似ており、写真の使用も無い。共通テストでは、正しいものを過不足無く含む選択肢を選ばせる設問で、不足した選択肢を選んだ場合でも部分点を与える出題があった。出題内容から別解と判断したとも考えられるため、この出題形式が2022年共通テストでも出題されるかどうかで意図的なものかどうか判断する。

地学・地学基礎

■地学基礎

センター試験よりも、思考力問題（実験・観察，探究活動を重視した問題や，日常生活と関連のある題材を扱ったような問題）が増えたが，センター試験と比べ，難易度は同程度であった。

思考力問題の分量は，センター試験と第2回試行調査の中間位の印象がある。第2問Aの台風の動きに関する問題は，図やグラフを読み取る問題で，思考力を要する。第3問B問4では，教科書にはない図が使われているが，問題文をよく読めば対応できる。

大問数が3つと昨年より1つ減った。設問数・マーク数は15で変化はない。

■地学

センター試験よりも，思考力問題（実験・観察，探究活動を重視した問題や，日常生活と関連のある題材を扱ったような問題）が増えたが，センター試験より，やや易化した。

思考力問題の分量は，センター試験と第2回試行調査の中間位の印象がある。全体的に，図やグラフの読み取り問題や計算問題が増加した。

第1問の特定のテーマに沿った分野横断的な総合問題は，第2回試行調査の第1問の出題形式を踏襲している。第3問Aは，レポート形式の問題であった。第4問B問5は，第2回試行調査でも扱われた，3つの事象の関係をグラフから読み取る問題である。第5問A問2は，与えられた資料をもとに数学的な手法を活用するという，共通テストの問題作成方針に沿った出題であった。第5問A問4は，センター試験や試行調査では見られなかった，10の累乗を解答させる，新しい形式の問題であった。

大問数は5問であった。設問数・マーク数は29で，昨年より1減った。

◆理科まとめ

「新傾向の問題が求めているコアにあるもの」は、以下が該当すると思われる。

○ 原理・法則の正確な理解

○ 実際性

・ グラフなどのデータを読み取って、数学的な手法を用いて活用できる力

知識の理解や思考力等を、新たな場面（教科書で扱われていないようなグラフ等を見たような時）でも発揮できるかを問う。

・ 身近な課題等について、原理・法則を当てはめて考えることができる力

自然の事物・現象から、本質的な情報を見出せるかを問う。

・ リンク力

異なる分野の事項等を関連させて考察できるかを問う。

世界史B

1. プレテストについて

- 1) 複数の資料や図版とともに会話文を織り込んで、授業や発表の場を設定した出題により、その場で考えさせる出題形式が見られた。
- 2) 個々の設問自体は、しっかりと読みこなすことにより、素直に解くことができる出題。
- 3) リード文や会話文、資料・図版を冒頭に提示する出題形式のため、ボリューム感あふれる出題であるが、本質を見抜くことにより、試験時間内で解ける出題になっている。

2. 共通テストについて

- 1) 共通テストでは、プレテストで見られたような（配点・正解とも）複数連動型、もしくは複数正解の出題は見られなかった。
- 2) プレテスト形式の出題に比して、共通テストの出題では、差異が見られた。
 - ① 大問構成：プレテスト 11 月と同一であった。
大問構成は、センター試験の 4 題構成から、5 題構成に変更。
 - ② マーク個数：センター試験とは差異が見られた。
マーク個数は、センター試験の全 36 個から、全 34 個・全 33 個に変更。

3. 2つの日程の差異

- 1) 共通テストの第一日程と第二日程には、出題形式上の差異が見られた。
- 2) 大問ごとの配点・マーク個数の違いがあったうえに、A・B・C区分にも差異が見られた。

4. 4回の試験を通して見える共通点とセンター試験との差異

センター試験に比して、共通テストにおける特色として、次の点が指摘できる。

- 1) (資料読解力) 会話文や複数の素材が提示され、あるいは文章中の空欄に関連した問いを組合せて出題するなど、その場で考えさせる出題形式。
会話文：<第一日程：第2問B，第4問B，第5問B>
複数の素材：<第一日程：第3問問8，第4問問2，問5（資料X・Y・Z），第5問問3（地域1・2・3），>
授業形式：<第一日程：第4問C>
発表形式：<第一日程：第3問C>
関連した問いの組合せ：<第1問問1・第3問問1・問2・問6，第4問問7・問8，第5問問2，第5問問4>
- 2) (実践力) 設問の本質を見抜く視点が備わっている受験生には、素直に解くことができる問題。
⇒日本からみた世界史における事件を語る文章を提示することにより、世界史で学んだ

知識を駆使して答えさせる出題形式。〈第一日程：第3問B〉

⇒日本史と世界史の比較といった、歴史のタテ糸に対する地域のヨコ糸をともに考えさせるきっかけをつかむことができ、世界史学習への興味を、より引き立たせる要素が備わっている。〈プレテスト2月：第1問A，11月：第4問問5〉

3) (文章読解力) 限られた試験時間内で、ボリューム感のある文章を読みこなすことが求められる。〈第一日程：第1問B，第3問C〉

5. 受験生に問われる力

教科書や資料集などを通じて学ぶ基本的な知識を正確に身につけることが求められている。また、その基本知識を、課題学習や探求学習を通じて活用・応用する力が問われている。資料などの文章読解力や図版資料の解釈力を高めることが重視され、基礎知識を前提としながらも、複数の歴史事象をテーマ学習のなかで正確に把握する能力が必要とされる。

地理B

1. プレテストについて

- 1) センター試験同様に、プレテストでは統計資料や図版の読み取り問題が多く出題される傾向を踏襲。
- 2) ただし、会話文を採り入れた探究授業や発表形式の設定で出題が見られた。
⇒「展示資料」として資料を掲示する例（11月：第3問＝展示資料Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ）
- 3) 設問自体に複数の資料を掲載したうえでのボリューム感あふれる出題
⇒組合せ問題として出題（11月：第2問問2，問3）
- 4) その場で考えさせる出題形式であるが、いずれも問題の本質をしっかりと読みこなすことにより、素直に解くことができる設問である。

2. 共通テストについて

- 1) 共通テストでは、プレテストで見られたような複数正解の設問（「すべて選べ」「二つ選べ（順不同）」の出題）は見られなかった。
- 2) プレテスト形式の出題に比して、共通テストの出題では、若干、差異が見られた。
 - ① 大問構成：センター試験の6題構成から、プレテスト（2月＝11月）、共通テストでは5題構成に変更。
ただし、A・Bの区分出題や、設問内容が連動するものが見られた（配点は個別）。
＜設問内容が連動するもの：共通テスト第一日程：第4問（1）・（2）＞
 - ② マーク個数：センター試験とは差異が見られた。
マーク数は、センター試験の全36個から、全32個・全30個に変更。
- 3) プレテストでは冒頭に衛星画像・デジタル画像を扱った出題がセンター同様に踏襲されていたが、共通テスト〔第一日程〕では、模式図を用いて考えさせる出題のものになっていた。
- 4) プレテスト〔第二日程〕の冒頭では、センター試験同様の形式となっていた。

3. 2つの日程の差異

- 1) 共通テストの第一日程と第二日程には、出題形式上の差異が見られた。
- 2) 大問ごとの配点・マーク数の違いがあったが、A・B・C区分にも差異が見られた。

4. 4回の試験を通して見える共通点とセンター試験との差異

センター試験に比して、共通テストにおける特色として、次の点が指摘できる。

- 1) (資料読解力) センター試験と同様に統計資料や図版を扱う設問は引き継がれているが、概して一つの設問内に複数の資料を参照して読み解く、ボリューム感ある出題形式のものが見られる。

2) 会話文を織り込んで探究授業や発表形式を設定したり、複数の資料を提示したうえで、その場で考えさせる出題形式のものが見られる。

会話文：授業における発表形式などの設定

<第一日程：第1問，第二日程：第1問，第5問>

<プレテスト2月：第4問・第5問， 11月：第3問，第5問>

複数の素材をもとに考えさせる出題：

<第一日程：第1問問3・問5・問6・問7，第2問問3・問4，第3問問5，第5問問4など>

3) (実践力) 設問の本質を見抜く視点が備わっている受験生には、いずれも素直に解くことができる問題。

4) (文章読解力) 総じて、限られた試験時間内で、ボリューム感のある文章を読みこなすことが求められる。

5) センター試験では選択肢の個数が4つまたは6つ(①～④または①～⑥)であったが、共通テストでは、8つまたは9つの選択肢を提示する出題が見られた。

<第一日程：第1問問3，第5問問4(30)⇒8つ，第二日程：第2問問3⇒9つ>

5. 受験生に問われる力

教科書や統計資料集，地図帳を用いた学習を通じて，基本的な知識を正確に身につけることが求められている。またその基本知識を，各種調査や地球的課題への取り組みなどの学習の場面で活用・応用する力が問われている。資料解釈力が重視され，基礎知識を前提としない初見の統計資料や図版資料においても正確に読み取る能力が求められる。普段の学習において，共通テストで問われる本質を見失わないように心がけることで，ボリューム感に圧倒されずに正解にたどりつくことができる。

日本史B

1. 試行調査について

平成 29・30 年度試行調査（プレテスト）では、図版や史料などの資料を用いた問題が多数出題され、主に次のような力を問われた。

- ・資料から読み取った情報と歴史的事象との関わりを類推する力
- ・複数の歴史的事象を比較して共通性や差異をとらえる力
- ・資料から歴史的事象を時系列的にとらえて資料と歴史的事象の関わりを考察する力
- ・歴史的事象を多面的・多角的に考察を通し、日本や世界の歴史の展開などをとらえる力

具体的には、従来のセンター本試験はリード文を読み、下線部についての問いに答える形式をとっていたが、試行調査ではいずれの回も史料や生徒の作成した資料、写真・地図などの視覚資料がリード文の代替として用いられている。全体で使用される写真の数はどちらの回も 10 点を超え、地理的な要素を持つ地図や、統計グラフなどを用いた問題も出題されている。また、これらの力を問うために、選択肢の形式も、従来のセンター本試験の形式（4 択と時系列を問う 6 択を基本とする）から新たな形式（変則的な 6 択や 9 択の問題、小問をまたぐ連関形式の問題、複数選択の問題など）が導入された。

2. 共通テスト（第 1 日程、第 2 日程）について

試行調査を受けて実施された 2021 年度大学入学共通テストでは、上記の試行調査の狙いを残しつつ、形式面では従来のセンター本試験の形式を採用している部分が見られた。具体的には、リード文を用いた大問が見られ、選択肢の形式も 4 択もしくは時系列を問う 6 択の 2 種類を基本としている。また、試行調査で見られた図版の多用も抑えられ、写真の枚数は第 1 日程で 3 点、第 2 日程で 1 点と、従来のセンター本試験に近い点数となっている。一方で、センター本試験ではあまり出題されることがなかった形式の問題も見られた。具体的には、第 1 日程第 1 問問 4〔設問番号 4〕や第 2 日程第 6 問問 2〔設問番号 27〕といった、グラフや表から情報を読み取らせ、資料を考察する力を問う問題が共通して出題されている。また、第 2 日程第 2 問問 3〔設問番号 9〕のような波線部の誤りを問う形式の問題も、日本史では新たな出題形式となっている。

3. 受験生に問われる力

共通テストでは、資料（表・グラフ・地図・史料など）を用いて多面的に考察する問題や複数の歴史的事象を比較考察する問題などが積極的に出題されており、従来型の基礎的な知識に加え、資料から読み取った情報と歴史的事象との関わりを類推する力、複数の歴史的事象を比較して共通性や差異をとらえる力などが求められている。

現代社会

1. 試行調査について

平成 29・30 年度試行調査（プレテスト）では、従来のセンター本試験に見られた、リード文を読み、下線部についての問いに答える、という形式から、生徒がまとめた資料や作成した発表データ、翻訳文などを題材に出題される形式をとっており、日常生活などに場面設定を置いた大問形式となっている。また、そこで問われる内容も、社会的事象等を多面的・多角的に考察するものや、制度や政策の本質を問うもの、課題解決に向けて設定された主張からその根拠を問うものなど、知識のみでは解くことが難しい問題が出題されている。具体的には、平成 30 年度の第 6 問問 1 に見られるような、複数の資料を候補にあげ、資料の内容ではなく、設定された条件の中で扱うべき資料を選ばせる問題などは、その傾向を顕著にあらわしている。また、これらの力を問うために、選択肢にも新たな形式（小問をまたぐ連関形式の問題や複数選択の問題）が導入された。

2. 共通テスト（第 1 日程、第 2 日程）について

試行調査を受けて実施された 2021 年度大学入学共通テストは、まず形式面では、第 1 日程、第 2 日程ともに、従来のセンター本試験で見られていた大問 6 題構成から 5 題構成へと変化しており、小問の数も 30 題へと減少している（2020 年センター本試験の小問数は 36 題）。一方で、試行調査で見られたようなリード文の変化については、従来のセンター本試験の形式を継承している部分が見られた。具体的には、リード文を用いた大問が再び設定されており、会話文なども多く用いられている。

内容面では、社会的事象等を多面的・多角的に考察する問題（第 2 日程第 3 問問 5〔設問番号 20〕など）、制度や政策の本質を問う問題（第 1 日程第 1 問問 8〔設問番号 8〕など）、が出題されており、こうした問いかけが、会話文などの形式を用いて日常生活の中で発見する課題として設定されているのが特徴と言える。また、表やグラフといった資料を用いた問題の数も増加しており、資料から正確な情報を読み取る力についても求められていることがわかる（2020 年度センター本試験の表・グラフなどの数が 2 点なのに対し、共通テストではいずれの日程も 5 点以上扱われている）。

3. 受験生に問われる力

共通テストでは、日常生活を題材にした問いかけの形式が顕著となっており、課題を発見し考察する過程などからの出題が増えている。こうした問いかけに対応する力が必要となる。また、個々の問題では、従来の基礎的な知識に加えて、社会的事象等を多面的・多角的に考察する力や制度や政策の本質について考察する力が求められる。

倫理

1. センター試験について

従来のセンター試験は、問題数や出題形式が近年ほぼ固定化していた。

問題数については、4つの大問それぞれに9問ほどの設問が出題されていた。出題形式としては、大問冒頭に1ページのリード文（文章または会話文）があり、リード文中に引かれた下線部に関連する思想や思想家についての設問が8問ほど続き、最後にリード文の趣旨や内容を問う設問がおかれた。また、各大問に1問程度、下線部に関連する原典資料を読み解く設問が出題されていた。そのほか、統計資料問題は全体で1問程度であり、写真や絵画はほとんど扱われていなかった。

2. 試行調査について

大問の数は4つでセンター試験と変わらなかったが、各大問がA～C（またはA・B）の中間に分けられ、その中に小問が配置された。各大問の配点は34点、24点、24点、18点となり、各大問がほぼ均等だったセンター試験から変化した。全体の設問数はやや減少したが、設問それぞれのボリュームは大きくなった。

出題形式は多様化し、連動型の設問（任意に選んだ立場から解答する第1問C問7）や、正解が複数ある設問（第1問C問8）など、いろいろな形式が試みられた。リード文の形式は、会話文、板書、レポート、メモ、発表原稿など様々なかたちとなった。また、統計資料問題はセンター試験と同様1問だったが、写真や絵画は合わせて8点となり、原典資料の数も大幅に増え、単に知識を問うだけでなく、資料を読み解く問題の比重が高まった。

3. 共通テスト（第1日程）について

大問の数や設問数は、ほぼ試行調査と同様であった。また、第1問、第2問はそれぞれI・II、I～IIIという中間に分かれるという試行調査の形式がとられた。第3問、第4問は冒頭に長めのリード文がおかれるというセンター試験の形式がとられ、連動型の設問や、正解が複数ある設問は見られなかった。

源流思想、日本思想、西洋思想、青年期、現代の諸課題という高校倫理の幅広い分野について、主に高校生の生活や学習の場面における様々な素材（会話、メモ、レポート、ノート、ポスターなど）を通じて、倫理の基本知識や、複数の資料を読み解く力が問われた。

4. 共通テスト（第2日程）について

第1日程では、第1問・第2問が中間形式（I・IIあるいはI～III）だったのに対し、第2日程は第1問～第3問について中間形式がとられた。

5. 受験生に問われる力

教科書を通じて学ぶ基本的な知識を正確に身につけることが求められている。またその基本知識を生活や学習の場面で活用・応用する力が問われている。また、読解力が重視され、基礎知識を前提としない初見の文章を正確に把握できる能力も必要とされる。

政経

1. センター試験について

従来のセンター試験は、問題数や出題形式が近年ほぼ固定化していた。

問題数については、4つの大問それぞれに8～10問ほどの設問が出題されていた。出題形式としては、大問冒頭に1ページのリード文（文章または会話文）があり、リード文中に引かれた下線部に関連する設問が問われた。

2. 試行調査について

大問の数は4つでセンター試験と変わらなかったが、第1問、第4問でA・Bの中間に分けられ、その中に小問が配置された。全体の設問数はやや減少したが、設問それぞれのボリュームは大きくなった。

大問の冒頭にあったリード文の代わりに、授業でまとめた説明、年表、冬休みの課題のテーマ、オープンキャンパスの配布資料などがおかれた。従来のセンター試験のように基本的な知識を用いて解答できる設問のほか、複数の統計資料を読み解いて思考する力を問う設問が多数出題された。

3. 共通テスト（第1日程）について

大問の数や設問数は、ほぼ試行調査と同様であった。また、共通テストでも、従来のセンター試験であった冒頭のリード文の代わりに、発表のためのノートが提示されたり、各小問で長めの設問文がおかれたりするなどして、政治分野、経済分野、国際分野について幅広く問われた。教科書の基本知識で解ける問題が減り、様々な資料を読み解いて思考する力を問う設問が増加した。

4. 共通テスト（第2日程）について

第1日程では見られなかった連動型の設問が出題された（第1問 問6）。

5. 受験生に問われる力

教科書を通じて学ぶ基本的な知識を正確に身につけることが求められている。またその基本知識を生活や学習の場面で活用・応用する力が問われている。また、読解力が重視され、資料を読み解く際には、用語の正確な理解と適用範囲や具体例を前提とする場合があり、難易度が高くなっている。

倫理, 政治・経済

1. センター試験について

大問の数は六つだった。第1問～第3問が倫理分野からの出題で、第4問～第6問が政経分野からの出題だった。単独科目の「倫理」と「政治・経済」（それぞれ第2問を除く）のリード文と設問が流用された。

2. 試行調査について

「倫理, 政治・経済」は実施されなかったため、「倫理」と「政治・経済」をどのように組み合わせるかは明らかにされていなかった。

3. 共通テスト（第1日程）について

大問の数が七つに増加した。第1問～第4問が倫理分野からの出題で、第5問～第7問が政経分野からの出題だった。単独科目の「倫理」第1問～第4問、「政治・経済」第2問～第4問から設問が流用された。

4. 共通テスト（第2日程）について

第1日程と同様であった。

